

鬼仏洞事件

海野十三

青空文庫

みとりず
見取図

鬼きぶつど仏洞の秘密を探れ！

特務機関から命ぜられた大陸に於けるこの最後の仕事、一つに女流探偵の風間三千子ちしの名誉がかけられていた。

鬼仏洞は、ここから、揚子江を七十キロほど遡さかのぼつた、江岸こうがんの〇〇にある奇妙な仏像陳列館ちんれつかんであつた。

これは某国の権益けんえきの中ちゆうに含められているという話だが、今は土地の顔役である陳程ちんていという男が管理にあたつていそうだ。

わが特務機関は、未だに公然とこの鬼仏洞の中へ足を踏み入れたことがないのであるが、近頃この鬼仏洞を見物する連中が殖ふえ、評判が高くなつてきたのはいいとして、先頃以來この洞内どうないで、不慮ふりよの奇怪な人死ひとしにがちよいちよあつたという妙な噂もあるので、さてこそ女流探偵の風間三千子女史が、鬼仏洞の調査に派遣せられることになつたのである。

これが最後の御奉公と思い、彼女は勇躍大胆にも单身〇〇に乗りこんで、ホテル・ローズの客となった。まず差^{さしあた}当りの仕事は、鬼仏洞の見取図を出して秘密の部屋割を暗記することだった。彼女はその見取図を、スカートの裏のポケットに忍ばせていた。

それから三日がかりで、彼女はようやく鬼仏洞の部屋割を、宙で憶^{おぼ}えてしまった。これならもう、鬼仏洞を見に入っても、抜かるようなことはあるまいという自信がついた。

無理をしたため、頭がぼんやりしてきたので、彼女は、その日の午後、しばらく睡^{ねむ}っていた。が、午後三時ごろになって、気分がよくなったので、起きて、急に街へ出てみる気になった。

その日は、土曜日だったせいで、街は、いつにも増して、人出が多かった。彼女は、いつの間にか、一等賑^{にぎや}かな紅玉路^{こうぎよくろ}に足を踏み入れていた。

舗道^{ほどう}には、露店^{ろてん}の喰べ物店が一杯に出て、しきりに奇妙な売声をはりあげて、客を呼んでいた。

三千子は、ふとした気まぐれから、南京豆^{なんきんまめ}を売っている露店の前で足を停^{とど}め、「あんちゃん。おいしいところを、一袋ちよう дайな」

と、銀貨を一枚、豆の山の上に、ぼんと放った。

「はい、ありがとう」

店番の少年は、すばやく豆の山の中から、銀貨を摘みあげて、口の中に放りこむと、一袋の南京豆を三千子の手に渡した。

「おいしい?」

「おいしくなかったら、七面鳥を連れて来て、ここにある豆を皆拾わせてもいいですよ」といつてから、急に声を低めて、

「……今日午後四時三十分ごろに、一人やられるそうですよ。三十九号室の出口に並べてある人形を注意するんですよ」

と、謎のような言葉を囁いた。

三千子は、それを聞いて、電気に懸ったように、びっくりした。

もうすこしで、彼女は、あつと声をあげるところだった。それを、ようやくの思いで、咽喉の奥に押しかえし、殊更かるい会釈で応えて、その場を足早に立ち去った。しかし、彼女の心臓は、早鉦のように打ちつづけていた。

無我夢中で、二三丁ばかり、走るように歩いて、彼女はやっと電柱の蔭に足を停めた。腕時計を見ると、時計は、ちょうど、午後四時を指していた。

（今の話は、あれはどうしても、鬼仏洞の話にちがいない。あと三十分すると、第三十九号室で、誰か人が死ぬのであろう。なんという気味のわるい知らせだろう。しかし、こんな知らせを受取るなんて、幸運だわ！）

三千子は、昂奮こうふんのために、自分の身体が、こまかに慄ふるえているのを知った。

（行ってみよう。時間はまだ間に合う。——もし鬼仏洞の話じゃなかったとしても、どうせ元々だ）

三千子の心は、既に決った。彼女は、南京豆売りの少年が、なぜそんなことを彼女に囁いたのかについて考えている余裕もなく、街を横切ると、鬼仏洞のある坂道をのぼり始めたのであった。

三千子が向うへ行ってしまうと、豆の山のかげから、一人の青年が、ひよつくり顔を出して、三千子の去った方角を見て、にやにやと笑った。

ちようしん
長身ちようしんの案内者

見るからに、妖魔ようまの棲すんでいそうな古い煉瓦れんが建だての鬼仏洞おにぶつどうの入口についたのが、四時十五分過ぎであった。彼女は、こんなこともあるうかと、かねてホテルのボーイに手を廻して買っておいた紹介者せうかいしやつきの入場券を、改札口と書いてある蜜蜂みつばちの巢箱すぼこの出入口のような穴へ差し入れた。

すると、入場券は、ひとりでに、奥へ吸い込まれたが、とたんに何者かが奥から、「これを胸へ下げてください」

と云ったかと思うと、丸型の赤い番号札が例の穴から、ひよこんと出て来た。

(呀あっ！)

そのとき、三千子の眼は、素早く或るものに注そそがれた。それは、奥から番号札を押し出した変に黄色い手であった。それはまるで、蠟細工ろうさいくの手か、そうでなければ、死人しびとの手のようにであった。

三千子は、とたんに商売気しょうばいぎを出して、その手をたしかめるために、腰をかがめて、穴の中を覗のぞきこんだ。

「呀あっ！」

ぴーんと音がして、番号札が、発止と三千子の顔に当ると、がたんと穴の内側から戸が下りると同時であった。三千子は、地上に落ちた番号札を、急いで拾い上げたが、胸が大きく動悸をうっていた。彼女は、戸の下りる前に、穴の内側を覗いてしまったのである。

（手首だった。切り放された黄色い手首が、この番号札を前へ押し出したのだ。——そして、これを胸へ下げてください”と、その手首がものをいった！）

女流探偵風間三千子の背筋に、氷のように冷いものが伝わった。

なるほど、噂にたがわぬ怪奇に充ちた鬼仏洞である。ふしぎな改札者に迎えられただけで、はやこの鬼仏洞が容易ならぬ場所であることが分ったような気がした。

だが、風間三千子は、もう訳もなく怖じてはいなかった。彼女は、女ながらももう覚悟をきめていた。一旦ここまで来た以上、鬼仏洞の秘密を看破するまでは、どんなことがあっても引揚げまいと思つた。

入口の重い鉄扉は、一人が通れるくらいの狭い通路を開けていた。三千子は、胸に番号札を下げると、その間を駆け足ですりぬけた。

びーん！

とたんに、彼女のうしろに、金属の軌きしる音がした。入口の重い鉄扉は、誰も押した者が
ないのに、早もう、ぴつたりと閉しっていた。

ふしぎ、ふしぎ。第二のふしぎ。

彼女は、しばらく、その薄暗い室の真中に、じつと佇たたずんでいた。さてこれから、どつち
へいつていいのか、さつぱり見当がつかないのであった。その室には電灯一つ点ついていな
かった。が、まさか、囚しゅうじん人になつたわけではあるまい。

一陣の風が、どこからとなく、さつと吹きこんだ。

それと同時に、俄にわかに騒そうぞう々しい躁そうおん音が、耳を打つた。躁音は、だんだん大きくなつた。
それは、まるで滝壺の真下へ出たような気がしたくらいだった。

彼女は、おどろいて、音のする方を、振り返つた。するといつの間にか、後に、出入口
らしいものが開ひらいていた。その口を通して、奥には、ぼんやりと明りが見えた。

(あ、なるほど、やつぱり第一号室へ通されるのだ！)

三千子は、脳裡のうりに、絹地きぬじに画えかれたこの鬼仏洞の部屋割の地図を思おもうかべた。彼女は、
今は躊躇ちゅうちよするところなく、第一号室へとびこんだのであった。

その部屋の飾りつけは、夜明けだか夕暮だか分らないけれど、岨がが々たる巖いわおを背そむにして、

頭の丸い地蔵菩薩らしい像が五六体、同じように合掌をして、立ち並んでいた。

轟々たる躁音は、どうやら、この巖の下が深い淵であつて、そこへ荒浪が、どーんと打ちよせている音を模したものらしいことが呑みこめた。

第一号室は、たつたそれだけであつた。

何のことだと、つづいて第二号室に足を踏み入れた三千子は、思いがけなく眩しい光の下に放りだされて、目がくらくらとした。

瞳をよく定めて、その部屋を見廻すと、なるほど、これは鬼仏洞へ来たんだなという気が始めてした。横へ長い三十畳ばかりのこの部屋には、中央に貴人の寝台があり、蒼い顔をした貴人が今や息を引取ろうとしていると、その周囲にきらびやかな僧衣に身を固めた青鬼赤鬼およそ十四五匹が、臨終の貴人に対して合掌しているという群像だつた。像はすべて、等身大の彫刻で、目もさめるような絵具がふんだんに使つてあつて、まるで生きてるように見えた。

赤鬼青鬼の合掌は、一体何を意味するのであろうか。三千子は、気をのまれた恰好で、唾然としてその前に立つていた。

するとそのとき、どやどやと足音がして、一団の人が入ってきた。見ると、それは、遅

しい身体つきの、中年の中国人が六七名、いずれも袖の長い服に身を包んでいた。彼等は、三千子よりも遅れて、この鬼仏洞を参観に入ってきたものらしい。

「さあ、いよいよこれが鬼導堂きどうどうです。赤鬼青鬼が引導を渡して、貴人がこれから極楽往生を遂げるというところ。人形のそばへよつてごらんさい。よく見ていると、息が聞えるようだ。はははは」

案内役らしい背のひよろ高い男が、一行を振りかえつて大笑たいしょうした。

三千子は、この第二号室の人形の意味が分つて、なるほど肯うなずいた。

おそろ
恐しき椿事ちんじ

三千子は、それとなく、この一行の後について、各室を巡めぐっていった。案内役の中国人は、一室毎に高まる怪奇な鬼仏の群像にてきぱきと説明をつけるのであった。

三千子は、その説明を聞きたさのあまり、ついて歩いているのであったが、鬼仏の群像

には、二通りあつて、一つは鬼が神妙らしい顔つきをして僧侶になつてゐるもの、それからもう一つは、顔は阿弥陀あみださまを始め、気高い仏でありながら、劍や弓矢などの武器を手にして、ふりまわしている殺さつぱつ伐なものと、だいたいこの二つに分けられるのであつた。

「仏も、遂には人間の悪を許しかねて、こうして劍をふるわれるのじゃ。はははは」

かの案内人は、説明のあとで、からからと笑う。

あたり憚はばからぬその太々しい説明をだんだんと聞いていると、この案内人は、この洞に飾つてある鬼仏像の一つが、台の上から下りて来て説明役を勤めているのじやないかと、妙な錯覚を起しそうで、三千子は困つた。

そのうちに、例の時刻が近づいた。南京豆売りの小僧が教えてくれた午後四時半が近づいたのである。三千子は、この一行に分れて、一刻も早く、例の第三十九号室へいつてみなければ間に合わないかもしれないと思つた。そこで彼女は、一行の前をすりぬけ、かねて勉強しておいた洞内の案内図を脳裏のうりに思い浮べ、最短通路を通つて、第三十九号室へとびこんだのであつた。

第三十九号室！そこは、どんな鬼仏像が飾りつけてある部屋だつたらうか。

そこは、案外平凡な部屋に見えた。

室は、まるで鰻うなぎの寝床ねとこのように、いやに細長かつた。庭には、桃ももの木が植えられ、桃の実が、枝もたわわになつてゐる。本堂から続ついてゐるらしい美しい朱しゆと緑との欄干らんかんをもつた廻廊かいろうが、左手から中央へ向かつてずーと伸びて来ている。中央には階段があつて、終つてゐる。その階段の下に、顔が水すい牛ぎゆうになつてゐる身体の大きな僧そうぎ形の像が、片足をあげ、長い青竜刀せいりゆうとうを今横に払つたばかりだといふ恰好をして、正面を切つてゐるのであつた。人形はそれ一つであつた。この人形の前を通りぬけると、すぐその向うに次の部屋へいく入口が見えていた。

(この室で、やがて誰か死ぬつて、本当かしら)

と、三千子は、桃の木の傍そばで、首をかしげた。一向そんな血ちなま醒まい光景まへざでもなく、青竜刀を横に払つて大見得おほみえを切つてゐる水牛僧すいぎゆうの部が、むしろ間まがぬけて滑稽こっけいに見えるくらいであつた。いくぶん不安な氣を起させるものといへば、この部屋の照明が、相当明るいには相違あひだないが、淡あわい赤せき色しよく灯とうで照明しやうめいされてゐることであつた。

そのときであつた。隣室に人声が聞え、つづいて足音が近づいて来た。

(いよいよ誰か来る)

時計を見ると、もう二三分で、例の午後四時三十分になる。すると、今入ってくる連中

の中に死ぬ人が交まじつているのであろう。三千子は、その人々に見られたくないと思つたので、人形と反対の側の入口の蔭に、身体をぴたりつけた。

すると、間もなく見物人は入ってきた。見れば、それは先程の五六人連れの中国人たちであつたではないか。

(やつぱり、そうだつた)

三千子は、心の中に肯うなずいた。部屋部屋を、順序正しく廻めぐつてくれば、この一行は、まだもつと遅れ、二三十分も後になつて、この部屋へ巡めぐつてくる筈だつた。ところが、例の不ふ吉きつな定てい刻こくにわざわざ合わせるようにして、この第三十九号室へ入ってきたところから考えると、いよいよこの中の誰かが、死の国へ送りこまれるらしい。これは自然な人ひと死としではなく、たしかにこれは企たくまれたる殺人事件が始まるのにちがいないと、風間三千子は思つたのであつた。

一行が、この部屋に入り、人形の方に氣をとられている間に、三千子は、入口をすりと抜け、その一つ手前の隣室、つまり第三十八号室へ姿を隠したのだつた。そして入口の蔭から、第三十九号室の有様を、瞬まばたきもせず、注ちゆう視ししていた。

「これは、水牛仏が、桃もも盗ぬすびびと人を叩き斬つたところですよ。ははははは」

案内役は、とつてつけたように笑う。

「水牛仏はこの人形だろうが、桃盗人が見えないじゃないか」

と、一行の中の、布袋ほていのように腹をつきだした中国人がいった。

「や、こいつは一本参った。この鬼仏洞のいつたえによると、たしかにこの水牛仏が、

せいりゆうとう
青竜刀

をふるつて、桃盗人の細首をちよん斬ったことになつとるのじゃが、どうい

わけか、始めから桃盗人ももぬすびとの人形が見当らんのじゃ」

「それは、どういわけじゃ」

「さあ、どういわけかしらんが、無いものは無いのじゃ」

「こいいうわけとちがうか。この鬼仏洞の中には、何千体か何万体かしらんが、ずいぶん

人形の数が多いが、桃盗人の人形は、どこかその中に紛れこんでいるのと違うか」

「あー、なるほど。なかなかうまくいい居ったわい。ははは。しかしなあ、紛れ

込んだるといふことは、絶対にない。もう何十年も何百年も、毎日毎日人形の顔はしらべ

ているのじゃからなあ。それに、その桃盗人の人形の人相書というのが、ちゃんとあるの

じゃ」

「本当かね」

「本当じゃとも、その桃盗人の人相は、まくわ瓜うりに目鼻をつけたる如くにして、その唇は厚く、その眉毛は薄く、額の中央ひたいに黒子ほくろあり——と、こう書いてあるわ。まるで、そこにいる顔子狗がんしよくの顔そっくりの人相じゃ。わははははは」

「あははは、こいつはいい。おい、顔子狗、黙っていないで何とかいえよ」
「……」

顔子狗と呼ばれた男は、無言で、ただ唇と拳をぶるぶるとふるわせていた。そのときである。どうしたわけか、室内が急に明るく輝いた。急に真昼のように、白光が明るさを増したのであった。人々の面めん色しよくが、俄かに土色に変わったようであった。これは天井に取付けてあった水銀灯が点灯したためであったが、多くの人は、急にはそれに気がつかなかつた。

「やよ、顔子狗。なんとか吐ぬかせ」

「それで、わしを嚇おどしたつもりか、盗ぬす人根性こんじようをもっているのは、一体どっちのことか。おれはもう、貴様との交際は、真平だ」

そういつて顔子狗は、さつさと、向うへ歩みだした。

「おい顔子狗よ」と例の案内役が、後から呼びかけた。

「お前とは、もう会えないだろう。気をつけて行け。はははは」

「勝手に、笑っている」

顔子狗は、捨台辞すてぜりふをのこして、一行の方を振りかえりもせず、すたすたと、水牛仏の前をすり抜けようとした——その瞬間のことであった。

「呀っ—」

顔かの身体は、まるで目に見えない板塀いたべいに突き当たったように、急に後へ突き戻された。とたんに彼は両手をあげて、自分の頸をおさえた。が、そのとき、彼の肩の上には、もはや首がなかった。首は、鈍い音をたてて、彼の足許あしもとに転った。次いで、首のない彼の身体は、俵たわらを投げつけたように、どうとその場に地響あしむとをうって倒れた。

一行は、群像のようになって、それより四五メートル手前で、顔子狗のふしぎなる最期さいごに気を奪さらわれていた。

遙か後方にはいたが、風間三千子は、煌々こうこうたる水銀灯の下で演ぜられた、この椿事ちんじを始めから終りまで、ずっと見ていた。いや、見ていただけではない。

（あ、あの人が危い！）

と思った瞬間、彼女は、ハンドバックの中に手を入れるが早いか、小型のシネ撮影器を

取り出し、顔子狗の方へ向け、フィルムを廻すための釦ボタンを押した。煌々たる水銀灯の下、顔子狗の最期の模様は、こうして極きわどいところで、彼女の器械の中に収められたのであった。

自分でも、後でびつくりしたほどの早業はやわざであった。職務上の責任感が、咄嗟とつさの場合に、この大手柄をさせたものであろう。

だが、彼女は、さすがに女であった。顔子狗の身体が、地上に転つてしまふ、とたんに、気が遠くなりかけた。

もしもそのとき、後から声をかけてくれる者がいなかったら、女流探偵は、その場に卒そ倒つひしてしまったかもしれないのだった。

だが、ふしぎな早口の声が、彼女の背後から、呼びかけた。

「おつ、お嬢さん、大手柄だ。しかし、早くこの場を逃げなければ危険だ」

「えっ」

三千子は、胆きもを潰つぶして、はつと後をふりかえった。しかし、そこには誰も立っていない。いや、厳密に言えば、青鬼赤鬼こころもが、衣ころもをからげて、田を耕している群像が横向きになつて立っていたばかりであった。

だが、どこからかその声は又言葉を続けるのであった。

「お嬢さん。おそくも、あと五分の間に、裏口へ出なければだめだ。知っているでしょう、近道を選んで、大急ぎで、裏口へ出るのだ。扉ドアが開かなかつたら、覗のぞき窓の下を、三つ叩くのだ。さあ急いで！ 彼奴きやつらに気がつかれてはいけない！」

その早口いしこまの中国語は、どこやら聞いたことのある声だった。だが彼女は、それを思い出しているいしこま違まちがなかつた。

「ありがとう」一言礼をいうと、彼女は、一旦後へ引きかえし、宙で憶えている近道をとおつて、一目散いちもくさんに裏口へ走つた。そして扉をどンドンどんと叩いて、ようやく鬼仏洞の外へ飛び出すことが出来た。

空は、夕焼雲に、うつくしく彩いろどられていた。彼女は、鬼仏洞に、百年間も閉じこめられていたような気がした。

帆村探偵登場

特務機関長が、最大級の言葉でもって、風間三千子の功績を褒めてくれたのは、もちろん当然のことであつた。

「ああ、これで新政府は、正々堂々たる抗議を〇〇権益財団に向けて発することができる。いよいよ敵性第三国の〇〇退却の日が近づいたぞ」

そういつて、特務機関長は、はればれと笑顔を作つた。

「抗議をなさいますの。鬼仏洞は、もちろん閉鎖されるのでございませうね」

「やがて閉鎖されるだろうねえ。しかし、今のところ、抗議をうちこむため、鬼仏洞は大切な証拠材料なんだ。現場へいった上で、あなたが撮影した顔子狗の最期の映画をうつして見せてやれば、何が何でも、相手は恐れ入るだろう」

特務機関長は、もうこれで、すっかり前途を楽観した様子である。

その翌日、新政府は、〇〇権益財団に向けて、嚴重なる抗議文を発した。

「わが政府は、〇〇の治安を確立するため、同地に、警察力を常置せんとするものである。これにつき、わが警察力は実力をもって、第一に、鬼仏洞を閉鎖し、第二に、鬼仏洞内にて殺害されたるわが忠良なる市民顔子狗の死体を収容し、第三に、右の顔殺害犯人の引渡し

を要求するものである”

といったような趣旨の抗議文であった。

ところが、相手方は、これに対し、まるで木で鼻をくくったような返事をよこした。

〇〇の治安は、充分に確保されあり、鬼仏洞内に殺人事件ありたることなし”

これではいけないというので、新政府は、更に強硬なる第二の抗議書を送り、且つその抗議書に添えて、風間三千子が撮影した顔子狗の最期さいごを示すフィルムの一齣ひとコマを引伸し写真にして添付てんぷした。

これなら、相手方は、ぎやふんというだろうと思つていたのに、帰つて来た返事を読むと、

”なるほど、洞内に於て、何某なにぼうが死亡しているようであるが、その写真で明瞭であるとおりに、何某から五六メートルも離れた位置より、彼等の内の何人たりとも何某の首を切断することは不可能事である。況んやいわ、彼等の手に、一本の剣も握られていないことは、この写真の上に、明瞭に証明されている。理由なき抗議は、迷惑千万である”

とて、真向まっこうから否定して来たのであった。

なるほど、そういえば、相手方のいうことも、一理があつた。

だが、一旦抗議を発した以上、このまま引込んでしまうことは許されない。そこでまた、相手方の攻撃点に対して、猛烈な反駁を試みた。

そのような押し問答が二三回続いたあとで、ついに双方の間に、一つの解決案がまとまった。それはどんな案かというのに、

「では、鬼仏洞内の現場に於て、双方立合いで、検証をしようじゃないか」ということになって、遂に決められたその日、双方の委員が、鬼仏洞内で顔を合わすこととなった。

新政府側からは、八名の委員が出向くことになったが、うち三名は、特務機関員であつて、風間三千子も、その一人であつた。

その朝、新政府側の委員五名が、特務機関へ挨拶かたがた寄つたが、三千子は、その委員の一人を見ると、抱えていた花瓶を、あわや腕の間からするりと落としそうになつたくらいであつた。

「まあ、あなたは帆村さんじゃありませんか」

帆村というのは、東京丸の内に事務所を持っている、有名な私立探偵帆村莊六のことであつた。彼は、理学博士という学位を持つている風変りな学者探偵であつて、これまで

に風間三千子は、事件のことで、いくど彼の世話になったかしれなかった。殊ことに、仕事中、彼女が危あやうく生せい命めいを落しそうなことが二度もあったが、その両度とも、風の如くに帆村探偵が姿を現わして、危難から救ってくれたことがある。

そういう先輩であり、命の恩人でもある帆村が、所もあろうに、大陸のこんな所に突然姿を現わしたものであるから、三千子が花瓶を取り落としそうになったのも、無理ではない。

帆村は、にこにこ笑いながら、彼女の傍へよつてきた。

「やあ、風間さん、大手柄をたてた女流探偵の評判は、実に大したものですよ。それが私だったら、今夜は晩飯を奢おごつてしまうんですがねえ」

「あら、あんなことを……」

「いや、遠慮なさることはいらぬ。何しろあの場合の、咄嗟の撮影の早業はやわざなんてものは、人間業じゃなくて、まず神業かみわざですね」

「おからかいになつてはいや。で、帆村さんは、政府側の委員のお一人でしょうが、どんなお役柄ですか」

「僕ですか。僕はその、戦争でいえば、まあ斥候隊せつこうたいというところですか」

「斥候隊は、向こうへいつて、どんなことをなさいますの」

「そうですねえ。要するに、斥候隊で、敵の作戦を見破ったり、場合によれば、一命を
投げだして、敵中へ斬り込みもするですよ」

「まあ、——」

といったが、三千子は、帆村の身の上に、不吉な影がさしているように感じて、胸が苦しくなった。

鬼気せまる鬼仏洞内での双方の会見は、お昼前になって、ようやく始まった。尤も明り窓一つない洞内では昼と夜の区別はないわけである。

○○權益財団側からは、やはり同数の八名の委員が出席したが、その外に、前には姿を見せなかつた鬼仏洞の番人隊と称する、獯猛な顔付の中国人が、太い棒をもって、あつちにもこつちにもうろうろしていた。

いよいよ交渉が始まった。

相手方から、背のひよろ高い一人の委員が、一番前にのりだしてきて、

「わしは、この鬼仏洞の長老で、陳程ちんていという者だ。お前さん方は、この鬼仏洞の治安が乱れているとか、中で善良な市民が謀殺ぼうさつされたとか、有りもしないことを、まことしや

かにいいだして、わが鬼仏洞にけちをつけるとは、怪しからん話だ」
と、始めから、喧嘩腰であった。

三千子は、後から、その長老陳程と名乗る男の顔を一目見たが、胸がどきどきしてきた。この長老こそ、先日顔子狗たちを連れて各室を廻っていた莫迦笑いの癖のある案内役であることを確認したからである。

彼女は、そのことを帆村にそつと告げようとしたが、その前に帆村は、前へとび出していった。

「やあ、陳程委員さん、私は帆村委員ですがね、こんなところで押し問答をしても仕方がない。現場へいって、常時の模様をよく説明してください」

「現場かね。現場は、ちゃんと用意ができています。すぐ案内をするが、あなた方は、洞内の規定を守ってもらわなければならん。第一、わしの許可なくして、物に手を触れてはならない。第二、煙草をすつてはならない。第三に……」

「そんなことは常識だ。さあ、現場へ案内してください」

一同は、やがて問題の第三十九号室に、足を踏み入れた。

室内の様子は、前と同じで室内には例の赤色灯が点いていた。ただ、顔子狗の斃れ

ていたところには、白墨で人体と首の形が描いてあることが、特筆すべき変り方であった。三千子は、あの日のことを、まざまざと思い出した。あやしい振動が、足の裏から、じんじんじんと伝ってくるような気がした。

「……顔の自殺死体のあったのは、あそこだ。われわれは四五メートル離れたこのへんに固つていた。これは、お前方の提供した写真にも、ちゃんとそのように出て居る」

陳程長老は、手にしていた白墨で、欄干の下に、大きな円を描いて、

「こんな遠くへ離れていて、顔の首を斬ることは、手品師にも、出来ないことじゃ。それとも出来るというかね。はははは」長老は、勝ち誇つたように笑った。

帆村探偵は、別に周章てた様子も見せなかった。彼は、長老の方に尻を向けて、顔の倒れていた場所へ近よつた。

「ほう、ちょうどこの水牛仏の前で、息を引取つたんだな。水牛仏に引導を渡されたというわけか。すると顔は、丑年生れか。ふふふん」

帆村は、いつもの癖の軽口を始めた。そして手にしていた煙草を口に啣えて、うまそうに吸つた。

「おい、こちら。煙草は許されないといいのに。さつき、あれほど注意しておいたじゃない

か」

長老陳程が、顔を赤くして、とんできた。

「ほい、そうだったねえ」

帆村は、煙草を捨てた。火のついた煙草は、しばらく水牛仏の傍かたわらで、紫煙をゆらゆらと高く、立ちのぼらせていた。

そのとき帆村は、なぜか、その煙の行手に、真剣な視線を送っていた。

げんえい
幻影の静止せいしじぶつ仏

（水牛仏がふりまわしているあの青竜刀は、本当に斬れそうだな。しかし、まさか顔子狗は、わざわざあそこへ首を持っていったわけではないのだ。こっちで斃たおれていたんだからなあ）

帆村は、興味ありげな顔付で、じっと水牛仏が、右へ払った青竜刀を瞞みづめた。帆村は、

その青竜刀が、高さからいうと、ちょうど、人間の首の高さにあり、その刃は水平に寝ているのが気になった。

(なるほど。すると、この人形が、このまま一まわりぐるつと廻転したとすると、あの青竜刀はここに立っている人間の首をさつと斬り落せるわけだ。してみると……)

帆村は、長老の傍へ行って、

「長老、あの水牛仏は動きだしませんかね。いや、ぐるぐると廻転しませんかね」

長老は、それを聞くと、かつと眼を剥いたが、次の瞬間には、口辺に笑みを浮かべ、

「とんでもない。人形が動いたり廻つたりしてはたいへんだ。傍へ行って、よく調べた方がいいじゃろう」

「調べてもいいですか。あなたは、困りやしませんか」

「あの人形が動いているのを見た人があつたら、わしは水牛の背に積めるだけの銀貨を呈上する」

「本当ですな、それは……」

「くだい男じゃ、早く調べてみたがよかろう」

帆村は頷いて、後をふりかえると、水牛仏に、じつと目を注いだ。

そのとき、室内が、俄にわかに明るくなつた。天井の水銀灯が、煌々こうこうと点火したのであつた。
「誰だ、照明をかえたのは……」

「照明は、自然にかわるような仕掛になつてゐるのじゃ」

長老が返事をした。しかし帆村は、長老がひそかに廻廊の柱に手をかけて、ちよつと押したのを見落しはしなかつた。

(へんなことをしたぞ。とたんに照明がかわつたところを見ると、あの柱に、照明をきりかえるスイッチがついてゐるのかもしれない)

煌々たる青あお白しろい光線が、室内を真昼のように照らしつける。水牛仏の顔が、一段と奇怪さを増した。

帆村探偵は、つかつかと水牛仏の方へ近づこうとしたが、そのとき、何おどろに愕おどろいたか、
「呀あっ」

と、低く叫んだ。

「おい、その棒を貸せ」

帆村は、後を振返つて、傍に立っていた番人の手から、棒を受取つた。

「さあ、皆、僕に注意しててください」

そういつたかと思うと、帆村は、その場に跣かかんだ。そして跣かかんだまま、そろそろと水牛
仏の方へ歩きだした。

「この棒に注意！」

帆村は、跣かかんだまま棒を高く差上げた。そして、しずかに水牛仏の前に近づいていった。
一同は、声をのんだ。

風間三千子だけは、帆村が何を見せようとしているかを感じづいた。
びしり。

高い金属的な音がした。と思った刹那せつな、帆村の差上げていた棒は、真二つに折れた。な
ぜ棒が折れたのか、一同にはわけが分らなかつた。何にもしないのに、折れるというのは
おかしいのだ。しかし棒はたしかに、真二つに折れた。

帆村は跣かかんだまま、後に振り返った。

「見えましたね。この太い棒が、鋭い刃物で斬られると同じように、切断されたのです。
棒の切口の高さを目測もくそくしてください。もしも僕が、こうして跣かかまないで、直立したまま
真直こつちへ歩いて来たとしたら、この棒の代りに、僕の細首ほそくびが、見事に切断されてし
まった筈です。どうです、お分りですかな」

委員たちは、首を左右に振った。帆村の首が切断されたらということとは分るが、なぜ、そうなるのか分らなかつた。

「棒を切つたのは、鋭い刃物です。その刃物は、皆さんの目には見えないと思うでしょう。ところが、ちゃんと見えているのですよ。この水牛仏が手にしている大きな青竜刀――

――これが、今この棒を叩き斬つたのです」

「おい君。そんな出鱈目をいつても、誰も信用しないよ」

長老陳程が、憎まれ口をきいた。

「出鱈目だというのか。じゃ、君は、立つたまま、ここまで来られるか」

「行けないで、どうするものか」

「えっ、ほんとうか。危い、よせ！」

帆村が叫んだときは、もう遅かつた。

長老は、つかつかと帆村の方へ駆けだした。

「ああッ」

次の瞬間、長老陳程の首は、胴を放れていた。そして鈍い音をたてて、床の上に転った。「あ、危い。誰も近よつてはいけない。われわれの目には見えないが、この水牛仏は、青

竜刀を手にもったまま、独楽こまのように廻転しているのだ。生命が惜しければ、誰も近づいてはいけない」

帆村は、そういうと、跣はだしで、一同のところへ引返してきた。

一同は、急に不安に襲われ、帆村より先に、前室へ逃げたそうとしたが、そこを動けば、また自分の首が飛ぶのじゃないかという恐れから、どうしていいか分らず、結局その場へたへたと坐りこんでしまった。

ふしぎな残像ざんぞう

「風間さん。あれは、人間の眼が、いかに残像ざんぞうにごま化されているかという証明になるのですよ」

事件のあとで、帆村は風間三千子の質問にこたえて、重い口を開いた。

「残像にごま化されているといいますと……」

「つまり、こうですよ。今、目の前に、回転椅子を持ってきます。僕がこれを、一チ、二イ、一チ、二イと、ぐるぐる廻します。そこであなたは、目を閉じていて、僕が、一とか二とかいったときだけ、目をぱつと開いて、またすぐ閉じるのです。つまり、一チ二イチ二イの調子にあわせて、目をぱちぱちやるのです。すると、この椅子が、どんな風に見えるか。ちよつとやってみましょう」

帆村は、廻転椅子を三千子の前において、それに手をかけた。

「さあ始めますよ。調子をうまく合わせることを忘れないで……。さあ、一チ、二イ、一チ、二イ、……」

三千子は、いわれたとおり、調子をあわせて、目をぱちぱちと開閉した。

「三千子さん、椅子は、どんな具合に見えましたか」

「さあ——」

「椅子は、じつと停っていたように見えませんでしたか」

「あ、そうです。椅子は、いつも正面をじつと向いていました。ふしぎだわ」

「そうです。それで実験は成功したのです。つまり、僕は椅子を廻転させましたが、あなたには、椅子がじつと停っているように見えたのです。これは、なぜでしょうか。そのわ

けは、あなたは、僕の号令に調子を合わせたため、椅子がちょうど正面を向いたときだけ、ぱつと目をあけて椅子を見たことになるのです。だから、椅子は、じつとしていたように感ずるのです」

「まあ、ふしぎね」

「そこで、あの恐しい水牛仏のことですが、あれも青竜刀をもって、ぐるぐる廻転していたのです。とても、目にもとまらない速さで廻っていたのです。しかしちよつと見ると、じつと静止しているように見えるのです」

「そう見えましたわ。でも、あたしたちは、誰も、目をぱちぱち開閉したわけではありませんわ」

「もちろん、そうです。しかし目をぱちぱち開閉するのと同じことが行われていたのです」
「同じことが行われていたというと……」

「水銀灯がつきましたね。あの水銀灯が、非常な速さで、点いたり消えたりしていたのです。しかも、水牛仏の廻転と、ちょうど調子が合っていたのです。つまり、水牛仏が正面を向いたときだけ、水銀灯は点いて、あの部屋を照らしたのです。だから、水牛仏は、廻転しているとは見えないで、いつも正面をじつと向いていたように見えたのです。お分り

になりますか」

「ええ。それは、そうなりそうですけれど、しかしあたしは、あの水銀灯が、別に点滅てんめつしているように感じませんでしたわ」

「それは、人間の眼が残像にごま化されるからです。あなたは、普通の電灯が、明るくなったり暗くなったり、ちらちらしているように感じますか」

「いいえ。電灯は、いつも明るいですわ」

「ところが、あの電灯も、実は一秒間に百回とか百二十回とか、明暗をくりかえしているのです。しかし人間の眼は、大体一秒間に十六回以上明滅めいめつするちらつきには感じがないのです。本当は明滅するんだけれど、明滅するとは感じないのです。映画でも、そうですよ。あれは、一秒間に十六齣しほとか二十齣とかの規定があつて、画面がちょうどレンズの前に一杯に入ったときだけ、光源から光がフィルムをとおして、映写幕のうえにうつるのです。その間は、映写幕は、まったくなんです、人間の眼には残像がしばらく残っているから、画面がちらちらしない。だから、フィルムをうんと遅く廻すと、画面がちらちついて見えます」

「そのお話で、いつだか教わつた映画の原理を思い出しましたわ」

「それが分れば、しめたものです。猛烈な勢いで廻転している水牛仏が、あたかも、じつと静止しているように見えるわけがわかったでしょう。分らなければ、今の廻転椅子のこ
とを、もう一度思い出してください」

「やつと、分ったような気がしますわ。しかし水牛仏の前を通った人で、首を斬り落とき
れなかった人が沢山あるのじゃないでしょうか」

「そうです。赤色灯のついているときは、安全なんです。そのときは、水牛仏は静止して
いるのです。そして水銀灯に切り替^{かわ}ると、水牛仏が廻転を始めるのです」

「あの水牛仏が、廻りだしたことが、よくお分りになったものね。危かったわ」

「いや、本当に危いことでしたが、僕にそれを知らせてくれたのは、煙草でしたよ」

「煙草？」

「そうなんです。長老陳程に叱られて、僕が捨てた煙草は火のついたまま、真直に煙をあ
げていたのです。その煙が、急に乱れたので、僕は、はつと気がついたんです。尤^{もつと}も、そ
れまでに、あの水牛仏の人形が、或いは廻りだすのじゃないかと疑いをもっていましたが、煙
草を捨てた直後には、煙がしずかにまいのぼるのを見たので、そのときは人形が動いてい
ないことを知ったのです」

「そのときは、まだ赤色灯ととうがついていたのですね」

「そうなんです。——そうそう、いいわすれましたが、自殺した長老陳程は、われわれにとつては悪い奴でしたが、永く某国で働いていた機械工だそうです。顔子狗を私刑したことから、はからずも一件の仕掛がばれて、彼の運命が尽つきてしまったというわけです。

科学を悪用する不心得者ふこころえものの末路は、いつもこのように悲惨ですよ」

そういつて、科学者の探偵帆村莊六は、彼の愛好あいこう惜まない紙巻煙草の金鷄きんしに、又火をつけたのであった。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第7巻 地球要塞」三一書房

1990（平成2）年4月30日第1版第1刷発行

入力：tatsuki

校正：浅原庸子

2002年10月21日作成

2003年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

鬼仏洞事件

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>